

山城とはいかなる城か

日本の城というと、高知城のように、石垣を積み上げて天守を備えた城を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。

しかし実際のところ、戦国時代に築かれた城のほとんどは山城と呼ばれるものだった。山城とは、天然の山を切り開いて造成した、いわば土の城。そしてその役割は、敵からの攻撃を防衛することに特化しており、まさしく戦うための城だったといえる。

下の図は、長宗我部氏が居城としていた岡豊城の想像復元図である。山の険しい地形を利用して、曲輪や堀、土塁を巡らせている。楠目城も、地形は異なるものの、基本的には同じような構造をしている。

山城の構成要素は主に3つ。1つ目は曲輪。山頂や山腹を削って平坦にした平場のことで、櫓などの構造物が建てられ、戦時には将兵が防備についた。山城の拠点だともいえる。

2つ目に堀。地面を深く溝に掘り込んだ防御施設で、水のない空堀が主だった。水を張った水堀は平城で見られる。

そして、3つ目が土塁。曲輪などを囲むように造られた土の防壁で、敵の侵入を阻んだ。土を盛り上げて固めるという作りだが、戦国時代の末期からは、土止めのための石積みが用いられるようになった。

地面を掘り、土を盛り上げて造った山城は遺構として残りにくい。しかし楠目城には、堀や土塁などの形がはっきりと残っている。山城の中に立ち、その遺構を目の前にすれば、県内屈指の山城としての威風を、いまもなお感ずることができる。

詰

城の中核となる平場で、山頂や尾根の最高所を平坦に削った曲輪のこと。中世の時代には、掘立柱の物見櫓のような簡易な建物があったのではと推測されている。曲輪は上から『詰』『二ノ段』『三ノ段』と順に呼ばれた。

虎口

曲輪への出入口。曲輪の正面に配した『平入り虎口』が多いが、攻防の要所だけに、戦国時代の末期からは、より守りに適した『喰違虎口』や『枡形虎口』などの複雑な様式も登場した。

堀切・横堀・豎堀

堀には、その形状や造られた場所によって呼び分けがされている。『堀切』は、尾根伝いに侵入してくる外敵に備え、尾根筋を掘り切って寸断することで、敵軍の進撃を阻んだ。『横堀』は、曲輪の周りに沿って造られた防御用の堀。『豎堀』は、山の斜面に沿って縦に掘ったもので、斜面での横移動を防いだ。

縄張

城づくりは『地選』と呼ばれる土地選びから始まり、どこを何にするかを定める『地取』を行い、現地に縄を張って設計した。これを『縄張』といい、図面を『縄張図』といった。

土居

中世の山城では麓に居館が造られ、戦のないときはそこで生活していた。その居館のことを『土居』といい、地名に『土居』という言葉が残る場所は、かつての居住地だったと考えられる。

岡豊城跡想像復元図

高知県立埋蔵文化財センター所蔵

